

(1)

知らなかつた

米沢と沖縄

友好の原点

2年伊藤 大二編集

沖縄の高校の教科書「琉球・沖縄史」に米沢から来た県令（知事）上杉茂憲の業績が、三ページにわたり書いてあるのを発見！この茂憲って誰だということで、調べみようということになりました。

茂憲は、米沢藩の最後の藩主で、幕末から明治維新の激動の時代を生きた人です。

年沖縄の二代目の県令（知事）に命じられるのです。彼はまず、「県民の生活実態を探り、県政の方策を決めること」を目的に沖縄本島、調査を終えた茂憲は教育と勧業に力をいれ、サトウキビ生産の拡大を推し進めました。



高く評価されている
上杉茂憲

この後も、米沢と沖縄は縁の深い土地になります。置賜地方で織られている紺糸は「米琉」と呼ばれます。沖縄の久米島の紺糸の技術を移入したものだそうです。また、文化勲章を受けた建築家伊東忠太は沖縄の建築を高く評価しました。そして、千賀良英之介という人は沖縄第二高等女学校の先生、そして校長を昭和十一年まで勤めたそうです。戦後、田中俊雄という人が、沖縄の織物の研究をして日本全国に紹介していくます。三人共沖縄を愛した米沢の人です。

調べてみて私達は、こういふ理由で沖縄市と米沢が、姉妹都市になつたのだとうやく深く納得しました。

沖縄との交流
その後



「沖縄の人が自らの手で沖縄を変えていかなければならぬ」として後に沖縄の発展に大きく関わることになる人物を東京へ遊学させました。しかし、そなたでは本土よりはるかに貧しい民を助ける

ても沖縄では歴史の教科書に載るくらい高く評価されているのです。茂恵の心には、上杉鷹山の精神「民を幸福にするために自分がいるのだ」という強い信念を持っていましたからだといわれています。

百人一首クラスマッチ

2007.1.17・18

連覇達成 二一六に苦戦

二一八

今年は去年以上に忙しくなり、練習にあてる時間が少なかつた中で、冬休み明けから本格的に百人一首の練習を始めました。

初戦 私たちは二年六組とあたりました。正直最初からこんなに苦戦するとは思いませんでした。

前半、一進一退の攻防で思うように札がとれず焦りが出た時もありましたが、気持ちを前向きに切り

普段通りの力を發揮できたのではないかと思います。そして見事連覇を達成しました。

来年私たちは受験があり参加できません。その最後の大會でこのような素晴らしい結果を得られ、とても良い経験をすることができました。

(鈴木美紀子)

私達二年六組は、十一月くらいから毎日お昼ごはんを早く食べ、図書室で練習をしてきました。初めては、下の句まで聞いてから札を取つていたのですが、練習を重ねるたび、札を取りスピードが上がつてしまい、みんな家で完全に歌を暗記し

練習した日々こそ勲章

二一六

てくるという努力をして、上の句だけで札が取れるようになりました。

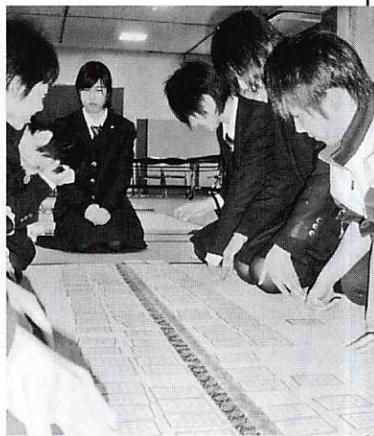
冬休みも何回か練習に集まりました。みんな本番に向けて気持ちが高まり、あとは対戦相手が決まるだけでした。一年戦はなんと二年八組。去年の優勝クラスでした。私は

達はそれを聞いてますます、しかし結果は八枚差で負け

(高梨由依子)

百人一首の結果

優勝	2-8
準優勝	2-7
3位	3-7
4位	1-5



三校合同 百人一首カルタ会

爽快感が核です
12月16日 米商にて

2-3 永井 肇



楽しい瞬間をイメージしながらひたすらひたすら練習した日々こそ私達の勲章だと思うことにしたので、悔いはありません。とても楽しい思い出ができました。

米商の方が読み手をしたのですが、百人一首クラブの人らしく、すごくうまかったです。チームは九里・米商・米工がそれぞれ入ってつくり、ゲームは、一試合ごとに対戦相手が代わり、いろんな人達と対戦することができ楽しかったです。九里では同じクラスの渡邊君が余裕の表情だったのが印象に残っています。

僕は、この「百人一首カルタ大会」を通して、かなり楽しいということに気付きました。図書委員でないけれど誘われて良かったです。このような大会がまたあつたら、また出たいし、前よりもうまくなつて多くの札を取れるようになりたいです。

九里・米商・米工の三校合同「百人一首カルタ大会」が十二月十六日(土)に米沢商業会場に行われました。三校合わせて約六十名の参加で、九里は三十名でした。

僕は百人一首を初めてやりましたが、かなり楽しめました。札を取った時の爽快感がこのゲームの核だと思います。古典の和歌を覚えてそれをゲームにした昔の人の知恵がすごいです。

米商の方が読み手をしたのですが、百人一首クラブの人らしく、すごくうまかったです。チームは九里・米商・米工がそれぞれ入ってつくり、ゲームは、一試合ごとに対戦相手が代わり、いろんな人達と対戦することができ楽しかったです。九里では同じクラスの渡邊君が余裕の表情だったのが印象に残っています。

僕は、この「百人一首カルタ大会」を通して、かなり楽しいということに気付きました。図書委員でないけれど誘われて良かったです。このような大会がまたあつたら、また出たいし、前よりもうまくなつて多くの札を取れるようになりたいです。

図書館貸出

ベスト10

(4月から1月12日まで)

1位	3-4	鈴木 碧	111冊
1位	2-6	荒井 千春	111冊
3位	3-1	砂川 尚人	108冊
4位	1-8	相田 拓樹	97冊
5位	3-5	狩野さとみ	81冊
6位	3-3	菊地 健太	75冊
7位	2-6	八巻 祐子	73冊
8位	3-4	鹿間優紀子	58冊
9位	2-7	安達 里美	57冊
10位	1-3	鈴木研一郎	53冊

私の好きな

主

人

公

みお ちづる 著

『ナシスの塔の物語』

リュタ

3年5組 遠藤 杏子

私の好きな
主人公
は、その技師と新技術でナシスは一時的に発展する。主人公のリュタという少年は、その技師と新技術に大きな憧れを持つていたが、彼の父はそれを受け入れようとはしなかった。やがて町は新技术による楽な生活を好む人が溢れ、父の様な古い教えを守る人と対立を始めるが、どちらつかずのリュタは一人で葛藤する。

人々が古い教えを忘れたため、町はやがて大災害に見舞われようとするが、古い教えを守り抜いた人々の手によって大きな被害は免れた。

彼は、勇者でも王様でもない私と同じ普通の若者だ。だからこそいつか私が困難に出会った時は、リュタの生き方が私に進むべき道を教えてくれるような気がする。

本を読むということが、いつ好きになつたのかが、ひどく曖昧で、気が付いたら本を読んでいた。それから、生活の「習慣」になつた。

それは、きっと家族と、中学校生活のせいだ。特に、両親は本が好きで、外出すると大抵本屋か古本屋に立ち寄る。漫畫でも読む。習慣になつた二つ目の中学

校生活といふのは、主に朝読書の時間。十分程度の時間でも毎日続けば、感覚で覚えてしまう。慣れるべく、月から金の五日間で一冊読み終わることができた。そのうち、その時間だけでは足らなくなり、休み時間も本に費やし、下校する時に本を返すのが、私の日課になつていて。

何にでも手を出す好奇心のおかげで、読む本が増え、友

言葉で泣いたことはなかつたから、新鮮だった。また、そういう本に出会いたいと思つてはいるし、出来ることなら、自分で創つてみたいと思つ。

異国の技師にもたらされた新技術でナシスは一時的に発展する。主人公のリュタという少年は、その技師と新技術に大きな憧れを持つていたが、彼の父はそれを受け入れようとはしなかった。やがて町は新技术による楽な生活を好む人が溢れ、父の様な古い教えを守る人と対立を始めるが、どちらつかずのリュタは一人で葛藤する。

彼は、勇者でも王様でもない私と同じ普通の若者だ。だからこそいつか私が困難に出会った時は、リュタの生き方が私に進むべき道を教えてくれるような気がする。

きつかけは、中学の朝読書

3年4組 鈴木 碧

本 嘸い虫の糞 明



達も増えた。

友達におすすめした本の中

で、泣いてしまつたものがあ

る。瀬尾まい子さんの「温室

デイズ」と村山由佳さんの「天使の卵」だ。ストーリー

で、登場人物の心情が、と

うのもあるけれど、心に響い

た言葉があつたからだ。「ど

れほど大切にしても、どれほ

ど愛しても、結局『死』には追

いつけない」という言葉にの

まれて、気が付いたら

泣いていた。

言葉で泣いたこと

はなかつたから、新

鮮だった。

また、そういう

本に出会いたいと思つてはいるし、出

来るこことなら、自

分で創つてみたいと思つ。

リュタの年齢設定はおそらく

私達高校生と大体同じくら

いだろう。物語の至る所で彼

はこの年齢特有の悩みに苛ま

れている。何が正しくて、何

に従えばいいかを見失つた

り、他人の目が気になつて自

分の本心を殺して他人に流さ

れるままの自分に疑問を抱い

たり、夢を迫いたいが老いた

親の姿を見て思ひとどまつた

り。リュタは空想上の人物な

のに、彼の悩みがやたら生々

しく身近なので親近感が湧いてきた。

彼は、勇者でも王様でもな

い私と同じ普通の若者だ。だ

からこそいつか私が困難に出

会つた時は、リュタの生き方

が私に進むべき道を教えてく

れるような気がする。



読書の楽しみ

記憶のタイムスリップ



鈴木 涼子 先生

出さないような些細なことまで

私はこの現象を密かに「記憶のタイムスリップ」と呼んでいます。そしてそのためのタイムマシーンは、のびた君の机の引き出しでもなく、キテレツ斎様が発明したものでもなく、まぎれもなくただの本なのだ。条件は、「自分が昔読んだことのある本」ただそれだけである。

昨年から私は読んだ本の記録をとり始めた。十年後、今の自分がタイムスリップすることができるよう。その時私は何を思い出すのだろう。今現在の楽しみ、悩み、戦っている何か、そういうものをどんな形で未来の私は受け止めるんだろう。・

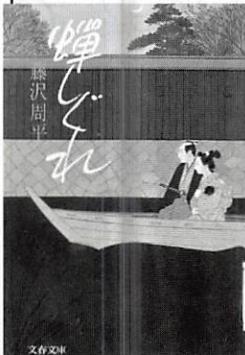
なつかしい音楽を耳にする、「あ、これはあるの時、あの時代に聴いていた曲だ」と思うことがある。そして、そんなときはままつてそのままに歌を聴いていた当時の頃や、自分のことを思い出してしまって。こういった経験は、きっと誰にでもあることだろう。わたしは、本を読むときもこれと同じような経験をすることがある。

三年ほど前から、私の中で勝手にブームになつている読書方法がある。それは、昔読んだ本をもう一度読むという方法だ。中にはタイトルも著者も忘れてしまい、探すのが困難な本もある。そんな本たちを大人になつた今、読んでいくと、自分が幼い頃よりも成熟し、また様々な経験を経てきているため、共感したり理解できたりすることが多くなっている。しかし、それ以外にも不思議な現象が起ころる。

名著の伝記
<その8>

藤沢周平 著

『蝉しぐれ』



文春文庫

下級武士である父助左衛門は、藩の権力抗争に巻き込まれ、切腹を命じられる。その父は最後に息子の文四郎に、「わしを恥てはならん」と言うのだった。その時、息子としての思いを伝えられなかつた文四郎は、「おやじを尊敬している」と言えはよかつたと櫛の大木に額を押し付けて泣くのである。

幼馴染みのふくとの恋愛も権力に奪われてしまうのだが、どこかにこの一途さが報われるべきだという柔らかなメッセージがあるよう物語は進んでいく。

非運に耐えながらも誠実に、真剣に生きる寡黙な主人公文四郎には、屈折してもなお人間の品性は失われてはいない。著者の藤沢周平は、十七歳の若者がつた一人現実に直面し、生の証を見出そうとする姿を、この「蝉しぐれ」で書きあがつたのだと思う。名誉や権威、華美を嫌つた著者の目線は、ひたむきに生きる庶民にむけられ、主人公にはいつも静かな愛情が込められている。

活動をふりかえって

三年七組 坂野 唯

委員長選挙があったのは、一昨年の十二月でした。投票ですごい接戦の中、私が委員長に選ばれたのです。

初めは委員長といつても何をしたらいいのか分からず戸惑っていた時に、前委員長だった先輩や副委員長、他の委員の人に支えられ、委員会を進めていく事ができました。

九里祭や研修旅行、百人一首などたくさんの行事を成功させる事ができたのも、委員全員の協力があつたからできることだと思います。

私は今までの活動を通して全員で取り組めば喜びも増すことを学びました。

ただ一つ悔いが残るとすれば、図書館の事務室に今年は男子生徒が満杯に入りすぎ、気おくれして私は入りにくく行事等の連絡がうまくいかなかつたと反省しています。

編集後記

読んでもらっていますか？毎回毎回いろいろな人がこの編集のために協力してくれています。一人一人一生懸命やっているので、興味がなくても、せめて一つぐらいは読んでもらえたら嬉しいです。

(二年 大二)